

# 「価値形態論」論争

井上 周 八

- 一 問題の所在と論争点の推移
- 二 久留間氏の宇野氏批判(一)
- 三 宇野氏の久留間氏反批判
- 四 久留間氏の宇野氏批判(二)
- 五 久留間氏の宇野氏批判(三)
- 六 宇野氏による価値の実体把握
- 七 結論

## 一 問題の所在と論争点の推移

『資本論』第一巻第一章第二節に展開されている価値形態論の理解をめぐって、戦後、久留間鮫造氏と宇野弘藏氏の論争があった。この論争は『資本論』におけるマルクスの上向的叙述方法がどのように理解されなかつたかを示すものとして興味深いものがある。宇野氏の例のようなマルクス批判はもちろんであるが、久留間氏の場合でも、その「廻り道」理解が一面的であつたことは、宇野氏の久留間氏反批判をして勇気づけるものがあつたと思われるので

ある。

両氏の応酬は、まず雑誌『評論』主催の『資本論』研究会（『評論』昭和二年三、四月号）で行われたのであるが、その後久留間氏がこの記録（『資本論研究——商品及び交換過程——』、河出書房、昭和三年十一月）に目を通し、さらにその後出版された宇野氏の『価値論』（昭和二年）や『資本論入門』（昭和三年）を読まれて、「価値形態論と交換過程論」と題する論文を『経済志林』十八巻一号（昭和五年一月）に発表されたことから始まった。

右の久留間氏による宇野氏批判に対し、宇野氏は「価値形態論の課題——久留間教授の批評に答う——」（『経済評論』昭和五年七月）を発表し、久留間氏に反論されたのであるが、久留間氏は宇野氏のこの反論を時間的にみることにないままに「価値形態論と交換過程論（二）」（『経済志林』十八巻三号、昭和五年七月）を発表され、その後その（三）で宇野氏のさきの反論に反批判を加えられたのである。

問題は、価値形態論と交換過程論はそのいずれもが商品から貨幣への発展の必然性を論証しているにもかかわらず、なぜマルクスは貨幣の必然性を二個所にわけて二重に論じなければならなかったのか、そもそもこの両者の本質的差異はどこにあるのか、という点に関するものであった。宇野氏はこの問題に対して、「直ちに注意されなければならないのは、交換過程論の冒頭にある商品所有者の役割についての叙述である」として商品所有者の役割を非常に重視し、このためさらに商品所有者を抜きにして価値形態論そのものを理解することは不可能である、とまで主張されたのである。これに対し久留間氏は、「価値形態論においては商品所有者は何ら価値形態論固有の問題を解明する上において積極的役割を果たすものではない」として、宇野氏の主張を全面的に受け入れがたいものであるとされた。

ここで久留間氏と宇野氏の論争を概括してのべておくと、商品所有者の欲望を捨象して価値形態論を理解しようかどうかということに関して、宇野氏が商品所有者の欲望を捨象しては無理であるとするのに対し、久留間氏は、捨象して理解すべきであること、およびマルクスのいわゆる「廻り道」が価値形態論理解の核心であること、を指摘された。これに対し宇野氏は、実はマルクスが「廻り道」といつているものが「自分にはどうしても廻り切れない」のであって、「この自分の疑問は、マルクスにあっては商品価値の実体を已に規定した後に価値形態を説いているのであるが、私は最初に価値の実体を規定するマルクスの方法そのものに疑問を有するのであって、この根本的疑問を解いてもらわなければ何と言われても首肯し難い」として、最後に冒頭における価値の実体の規定方法に疑問を提起するのである。したがって、この論争ではその内容において、第一に商品所有者の欲望を捨象して価値形態論を理解できるかどうか、第二にマルクスの「廻り道」は果して廻り切れるかどうか、第三に『資本論』の冒頭における価値の実体把握は方法的に正しいかどうか、という三つの問題が段階的に提起されているとみることができよう。このうちとくに、第一、第二の点については両氏の論争そのものが直接解答を与えているとみることができよう。このうちとくに、第一、第二の点については両氏の論争においては直接とりあげられなかった（しかし、この第三の点が正しく把握されなければ第一、第二の点も終局的に理解されたことにはならない）のである。

また久留間氏と宇野氏の論争は、「価値形態論は商品所有者の欲望を無視しては理解されえない」という宇野氏の主張を中心に行われたため、久留間氏が多年もっていたところの「価値形態論と交換過程論とは互にどのような関係にあるのか、いずれも貨幣の必然性を論証しているのに、なぜマルクスは二か所に分けて二重に論じているのか、そもそも両者はマルクスの叙述の方法において如何なる固有の意義を有するか」という問題に対する積極的展開が、両

氏の上記の論争そのものなかではなされていない。

## 二 久留間氏の宇野氏批判<sup>(一)</sup>

価値形態論に対する宇野氏の疑問点は「商品所有者の役割を捨象して価値形態論を理解できるか」ということに帰着する。そしてこの疑問に対しては、宇野氏はあらゆる視角から商品所有者の欲望を捨象しては価値形態論を理解することはできないと否定的に答える。宇野氏のこのような否定的見解を批判するにあたって、久留間氏は宇野氏の商品所有者の欲望を考慮に入れて価値形態論を理解せねばならないという主張の根拠を次の三点に要約されている。<sup>(1)</sup>

(1) 行論の順序としては、まず宇野氏の独自の主張がいかなるものであるかを考察し、ついでこれに対する久留間氏の反論をみるべきであろう。ところで、宇野氏の見解はさきにも述べたように『評論』主催の『資本論』研究会における発言や、その後出版された氏の著書にみられるものであるが、その論点は残念ながら論理的に整理されたものではない。これに対し久留間氏の宇野氏批判は、宇野氏の所論を三点に整理要約したうえで展開されている。そして、この久留間氏による宇野氏の主張の要約は、その後の宇野氏の久留間氏への反論の過程においても、宇野氏自身により肯定されたとみることのできるものである。それ故、両氏の論争を紹介し、その核心をつかむために、久留間氏による宇野氏の主張の要約をそのまま踏襲することにした。

まず久留間氏による宇野氏の主張の要約を引用しよう。

「(一)、簡単な価値形態においてなぜ特定の商品が等価形態におかれているかは、相対的価値形態にある商品所有者の欲望を抜きにしては理解されえない。たとえば二〇エルレのリンネル・イコール一枚の上衣という場合に、等価形態に上衣があるのは、それがリンネル所有者の欲望の対象だからだ、と考えねばならない。

(二)、所有者を考えないかぎり、相対的価値形態にある商品と等価形態にある商品とがなぜそれぞれの形態にあるかがわからなくなり、どちらの商品がどちらの形態にあっても同じだということになる。価値を能動的に表現する要求は所有者がもつ要求であり、一定の商品が相対的価値形態にあるのは所有者があるからである。これに反して等価形態にある商品は観念的にあるので、現実的には所有者もまだ現われていない。こう考えてはじめて価値形態の主體的把握が可能となる。

(三)、一般的価値形態に対する貨幣形態の本質的な差異は商品所有者の欲望を考慮に入れることによってはじめて明瞭になる。すなわち一般的等価物が貨幣になると、その本来の使用価値のゆえに欲求され、したがってそれによって商品の価値が表現される、という関係にはとどまらなくなる。この特徴を逸すると、一般的価値形態と貨幣形態との間に本質的な区別は立てられないことになる」(『経済志林』十八巻一号五―六ページ)。

すなわち宇野氏の主張は、久留間氏により、(一)価値形態Ⅰにおいて特定商品が等価形態に置かれるのは相対的価値形態にある商品の所有者の欲望による、(二)相対的価値形態および等価形態にそれぞれの商品が置かれるのは商品所有者の欲望によってのみ理解される。欲望を考えなければ方程式の右辺と左辺をいつでも置き換えることができることになってしまう、(三)一般的形態に対する貨幣形態の本質的な差異は商品所有者の欲望を考慮に入れることによって始めて明瞭となる、という三点に要約されているのである。

そこでまず(一)の主張であるが、この点を宇野氏自身は次のようにのべている。

「使用価値を抽象的な個々の欲望を離れた一般的な使用価値として、ということになると、理解できない。むしろ価値形態の最初のところから貨幣形態までの発展も商品の所有者を入れて考えた方が明確になると思う。例えばリン

ネルと上衣の關係でリンネルの価値を表わそうとするとき、上衣に対するリンネル所有者の慾望を考へて始めてその使用価値による表現が分るように思う」(『資本論研究——商品及交換過程——』一四二ページ)。

「根本的な問題を提起して見たいと思う。リンネルが相対的価値形態にあつて上衣が等価形態にあるという場合、リンネルは何故上衣を等価形態にとるに至つたか、それにはリンネルの所有者の慾望というものを前提しないでもよいだろうか。そういう關係を離れて斯ういう形があり得るだろうか」(同上二五七ページ)。

「価値の表現に於いても商品所有者まで抽象していいかどうかが問題だ。例えば所有者なしには二〇エレルのリンネルが上衣一枚に値するという表現はあり得ない。それまで抽象するのはどうでしょう。元來商品は何人かの所有物になつて現れて来る」(同上二五九ページ)。

「勿論資本論では価値形態と交換過程とが分けて説いてある。それを理解するのに吾々が分けたものとして理解するとしても、リンネルの所有者を抽象してリンネルそのものを考えたとすると何故相対的価値形態にあるリンネルは、等価形態に上衣をもつてきたかということは分らない。抽象してしまつてゐるから何をもつてきてもいいということになると已に拡大された価値形態になつてくる」(同上二六〇ページ)。

右の主張に対する久留間氏の反論は「価値形態論と交換過程論(一)」「(この論文はその後の論文(二)および(三)を一貫する久留間氏の宇野氏批判の基本的見解を示す)において次のように展開される。

久留間氏はまず宇野氏の「リンネルが相対的価値形態にあつて上衣が等価形態にあるという場合、リンネルは何故上衣を等価形態にとるに至つたか、それにはリンネル所有者の慾望というものを前提しないでもよいだろうか。そういう關係を離れて斯ういう形があり得るだろうか」という疑問に対して、このような疑問はそれ自体としてはいかに

ももつともなことであり、「そういう形を離れて斯ういう形がある」などとは久留間氏自身も決して考えていない、とひとまず答え、さらに、しかし「リンネルが何故上衣を等価形態にとるに至ったか」はリンネル所有者の欲望を考慮に入れないでは理解され得ないとしても、「リンネルが何故上衣を等価形態にとるに至ったか」というような質問自体は価値形態論固有の目的からみて必要ではない、とする。では氏の価値形態論固有の目的とは何であろうか。

「私の基本的な考えはこうである。価値形態論の目的は商品の価値が現象する形態を明かにすることにあり、その究明は、商品の価値が事実上つねにそういう形で現象するところの謂わゆる価値方程式を分析することによって行われる。そしてこの分析に際しては、価値方程式は——科学的な経済学の方法としては当然のことであるが——所与の事実として受けとられる。この価値方程式を所与の事実として受けとり、それを分析するということは、必ずしも価値形態論に特有なことではない。それは、商品の分析を課題とする資本論第一章の全体を通じての事実である。ただ、第一および第二節においては、方程式の両辺にある商品には、それらのいずれでもない共通な或るもの等量が存在しなければならぬ、という点に着眼して分析が行われたのに反して、第三節の価値形態論では、左辺にある商品と右辺にある商品とがここで演じている異った役割に着眼して分析が行われるのである。かくしてマルクスは、価値形態論においては最初に先ず *20 Punden von Konsumiergegenständen* を所与のものとして仮定し、これを右の立場から分析することによって、ここではリンネルがその価値を上衣で表現し、上衣はこの価値表現の材料として役立つというところ、すなわちリンネルは能動的な役割を演じ上衣は受動的な役割を演じているということ、式の構造そのものから確認する。そしてそこから出発して、商品の価値の他商品の使用価値による表現のメカニズムと、このメカニズムに制約された価値表現の発展の必然的な過程とを究明しているのである。これが、私の理解するとこ

ろでは、資本論における価値形態論の主旨なのである。従って、右の式においてなぜ他の商品ではなくて上衣が等価値形態におかれているかは、リンネルの所有者の慾望を抜きにしては考えられないにしても、そういうことを考えることは価値形態論の任務には属しない」(『経済志林』十八巻一号八ページ)。

そして、このような久留間氏の見解に対して予想されるもっとも一般的な反対論を、氏はみずから次のように設定される。

「おまえは、価値形態論としては一定の方程式を所与のものと仮定して、右辺の商品の使用価値による左辺の商品の価値表現を分析し究明すればよいので、なぜ右辺に他の商品ではなくて或る一定の商品が——例えば小麦ではなくて上衣が——置かれているかは問題にする必要がないと云うが、左辺すなわち相対的価値形態にある商品の価値が右辺すなわち等価値形態にある商品の使用価値によって表現されるという関係そのものが、相対的価値形態に立つ商品の所有者の慾望を抜きにしては理解されえない筈である。等価値形態にある商品の使用価値が相対的価値形態にある商品の価値を表現しうるのは、それが相対的価値形態にある商品の持主の慾望の対象だからであって、そういう関係を考慮しないでは価値表現の關係そのものが明かにされえない筋合にある。従って、そういう関係を考慮することは、価値形態論にとって埒外のことどころではなく、正にその肝要をなすものと云わなくてはならぬ」(同上九一—一〇ページ)。

このみずから設定した反対論に対して、久留間氏は答える。

「先ず第一に、簡単な価値形態において、等価値形態に或る特定の商品が置かれているのはなぜかという問題と、等価値形態に置かれている商品の使用価値が相対的価値形態に立つ商品の価値を表現しうるのはなぜかという問題とは、はっきり区別して考えられうるし、また区別して考えねばならない二つの異った問題である。このうち前の方の問題



は、相対的価値形態にある商品の所有者の慾望を考慮に入れることによってはじめて答えられると共に、その慾望との関連を考慮することによって容易に答えられる。しかし後の方の問題はそうではない。後の方の問題は、相対的価値形態にある商品の所有者の慾望に基いて或る特定の商品が等価形態に置かれているということが前提された上で、なお解明さるべく残るところの問題であり、そういうことを所与の事実として前提した上ではじめて独自の問題として明確に設定されうる問題である」(同上二一ページ)。

以上で久留間氏は、簡単な価値形態において、(1)等価形態に或る特定の商品が置かれているのは何故かという問題と、(2)等価形態に置かれている商品の使用価値が相対的価値形態に立つ商品の価値を表現しうるのは何故かという問題とは、はっきり区別せねばならないとし、問題の(1)については宇野氏の考えるように相対的価値形態にある商品所有者の慾望を考慮に入れることによってはじめて答えられるが、問題(2)は問題(1)を明白な前提とした上ではじめて独自の問題として解答されねばならないのである、と指摘される。そしてさらに、この問題(2)こそ価値形態論において究明さるべき基本的問題である、とし、氏のいわゆる「価値形態論の基本的な点」をふくむ論旨を次のように説明される。

「ここで吾々が何よりも先ず注意しなければならないことは、20 Hellerのリンネル＝1枚の上衣であることは、20 Hellerのリンネルは一枚の上衣に値する、という価値方程式において、リンネルはいきなり自分を上衣に等置することによって価値形態を得ているのではなくて、先ずもって上衣を自分に等置することによって上衣に価値物としての、すなわち抽象的人間的労働の直接な体化物としての、形態規定を与え、そうした上ではじめて、この価値物としての定在における上衣の自然形態で、自分の価値を表現しているのだということである。こういう廻り道をしな

は、自分は上衣に等しいのだと自称することによって、自分を価値物にすることはできない。それでは単なる独りよがりになってしまう。他面において、リンネルが上衣の自然形態でその価値を表わしうるためには、すなわち上衣の自然形態そのものを自らの価値の形態にしうるためには、あらかじめ上衣が価値物としての存在を与えられていなければならぬ。言葉をかえて云えば、上衣の自然形態がそのまま抽象的人間の労働の体化物を意味するものとされていなければならぬ。そしてそれは、リンネルが上衣を自らに等置することによって行われるのである。リンネルは、自分は上衣に等しいのだと自称することによって自分を価値物にすることはできないが、上衣は自分に等しいのだと宣言することによって上衣を価値物（（といつてももちろんこの場合には単にリンネルにとってのみ通用することであつて、爾余の商品に通用することはできないが））にすることはできる。そこでリンネルは、かようにして上衣を価値物にした上で、自分は価値としては上衣と同じなのだ、ということによって、上衣の形態において、自分自身の価値性を格を表現するのである」（同上二三四ページ）。

この引用文中久留間氏が眼目としたことは、「リンネルは先ず自分を上衣に等置しているのではなくて、上衣を自分に等置することによって上衣を価値物にしている」という点であり、氏はこの点については『資本論』初版の長谷部訳および宮川訳に、不注意か、もしくは根本的な誤解にもとづく誤訳があるとの指摘をされた。<sup>(2)</sup>

(2) „Qualitive setzt sie dem Rock gleich, indem sie auf ihn bezieht als Vergegenständlichung gleichartiger menschlicher Arbeit, d. h. ihrer eignen Wertschubstanz, und sie setzt sich nur einen Rock gleich statt x Röcke, weil sie nicht nur Wert überhaupt, sondern Wert von bestimmter Grösse ist, ein Rock aber gerade soviel Arbeit enthält als 20 Ellen Leinwand.“ (K. Marx, Das Kapital, Bd. I, Verlag von Otto Meisner, Hamburg 1867, S. 29/30)

長谷部訳「質的にリンネルが自らを上衣に等置するのは、リンネルが云々」（岩波文庫版五三三ページ）。

宮川訳「リンネルが自らを上衣に質的に等しとするのは、リンネルが、云々」(研進社版二五三ページ)

そして宇野氏もまた、誤解かまたはこの点をはっきりさせることの重要性についての認識不足があるのではないかと、宇野氏の価値論を次のように引用する。

「此の「リンネルの価値」「対象性」自身は、そのまま攫むことはできない。リンネル所有者は、リンネルの価値をリンネルと交換したいと思う他の商品、例えば上衣によって表現せざるを得ないのである。その場合上衣なる商品は彼にとつては、已にリンネルと同じ質のものとなっている。『使用価値』としてはリンネルは上衣と感覚的に異なる一つの物であるが、価値としては『上衣に等しきもの』であり、したがってまた『上衣と同様に見える』のであって、リンネルの価値は、上衣に於いてその表現を与えられることによって、その使用価値と分離した表現を得るのである。

それは勿論リンネルを作る労働が、織物労働なる有用労働としてではなく、上衣を作る労働と等しいものとして少くとも此の二種の異った具体的労働に共通なものとしての人間労働に還元されることによるのであるが、それは決して直ちに両者に共通な抽象的人間労働としてではなく、リンネルの織物労働を具体的な上衣の裁縫労働に等しいものにするという『廻り道』として行われる抽象である。

リンネルの価値が上衣に於いて表現せられるということは、先ず前提として上述の如くリンネル自身が、自分を上衣に等しいものにならなければならないが、それが行われるとリンネル所有者は、自分の要求する一定量の上衣に対して、リンネルの幾何を提供するかという問題に入ってくる」(『価値論』一四二―四ページ)。

このような宇野氏の説がさきの久留間氏の理解と一致しないことは明白であり、久留間氏は、もし直接に「リンネ

ルの織物労働を具体的な裁縫労働に等しいものとする」ことによって、織物労働が抽象的な人間労働に還元されうるものとすれば、リンネルはそれによって勝手に抽象的人間労働の直接的体化物に、すなわち価値になることができるだろう、だがそれでは独りよがりであり、マルクスの「廻り道」をしていない、と宇野氏の安易な独りよがりの廻り道を排撃し、マルクスの次のことばを引用する。

「たとえば、上衣が価値物としてリンネルに等置されることによって、上衣のうちに含まれている労働がリンネルのうちに含まれている労働に等置される。さて、なるほど、上衣を作る裁縫は、リンネルを作る機織とは異なる種類の、一つの具体的な労働である。しかし機織との等置は、裁縫を事実上、双方の労働における現実に同等なものに、人間的労働というそれらに共通な性格に、還元する。こうした廻り道をして、それから「この『それから』(unddann)に注意すべきである——久留間」機織もまた、それが価値を織るかぎりでは裁縫と区別されるべき何らの特徴ももたず、かくして抽象的・人間労働だということが語られているのである」(『資本論』第一巻、インスチトゥート版、五五—六ページ)。

そして、このマルクスの「廻り道」が正しく理解されないと、上衣の使用価値がそのままリンネルにとって価値の姿になるということの意味が間違つて把握されることになる。すなわち、リンネルにとっては上衣の自然形態は単にリンネルの価値を映し出す鏡として役立つにすぎず、リンネルは人間ではないのだから何らの欲望を持たず、保温やお洒落の手段としての上衣すなわち欲望の対象としての上衣の使用価値には何らの関わりもあり得ない、と価値形態論における商品所有者の役割を排除する。

しかし、価値形態論において商品所有者の欲望の演じる役割が捨象されているとの久留間氏の主張は、等価形態に

ある商品がある特定の使用価値として等価形態の役割を果すことを否定するものではない。ただ久留間氏は、上衣は等価形態にある場合、リンネルの所有者の身なりをととのえる所有物としてこの役割を演じるのではない、と主張されているにすぎないのである。ところが、この点に関しては宇野氏の理解に不十分さがあり、そのために宇野氏は「使用価値を抽象的な個々の欲望を離れた一般的な使用価値として、ということになると、理解できない」(『資本論研究』上巻一四二ページ)と告白される。宇野氏は商品所有者の欲望を捨象すると個々の欲望を離れた使用価値一般となると解釈されるのであるが、久留間氏はこのことは使用価値が欲望の対象として演ずる役割が捨象されたことを意味するのであって使用価値一般とはならないとされるのである。そして「上衣が等価形態に置かれるのはリンネル所有者の欲望の対象であるからであるが、等価形態に置かれた上衣がリンネルの価値を表現しうるのは、リンネル所有者の欲望の対象であるからではない」(『経済志林』十八巻一号二六ページ)として、あくまでも価値形態論において商品所有者の欲望を考慮することの無意義な点をついているのである。また久留間氏は、もしかすると宇野氏が「個々の欲望を離れた一般的な使用価値として」といわれる場合、これが万人の欲望の対象としての貨幣の「一般的使用価値」のことであるならば、この場合もやはり欲望に関して考えられた使用価値であることに変わりなく、したがって商品の価値がどうして他商品の使用価値で表示されるかという価値形態論にとってのもっとも基本的な問題の解明には何の役にも立たないと補足している。

最後に久留間氏は、宇野氏の「使用価値一般」の誤解と内的連関を持つと考えられる宇野氏の「リンネルの所有者を抽象してリンネルそのものを考えたとすると、何故相対的価値形態にあるリンネルは、等価形態に上衣をもつてきたか」ということは分らない。抽象してしまっているから何をもってきてもいいということになると已に拡大された価

価値形態になって来る」(前出)という見解に批判を加え、既にのべた氏の基本的見解、すなわち、吾々は何故リンネルの等価形態に上衣が置かれているかについてはリンネル所有者の欲望を抜きにして理解できるとは決して思っていない、また等価形態に上衣をもってきたのは商品所有者の所為であつて商品リンネルは何ら関知するところではなく、商品と商品との関係である価値関係を純粹に考察する場合には商品所有者の所為は切捨てるべきである。「何をもつてきてもいい」ということは宇野氏の言われるとおりであるが、これは設例の場合であつて、ひとたび一定の式たとえば  $20\text{フェルトのジャケット} = 1\text{枚の上衣}$  が設例された以上、この両極の商品をとりかえることは許されない、したがつて商品所有者が「抽象されてしまつてゐるから何をもつてきてもいいということになると已に拡大された価値形態になつてくる」という宇野氏の見解は、どうしてそのような見解をとることができるか理解に苦しまざるをえない、もし強いて想像すれば宇野氏は、リンネル商品所有者の欲望を離れていかなる使用価値をもつてきてもいいなら、それは使用価値一般であり、具体的な使用価値からその特殊性を捨象した使用価値一般ということにほかならず、そうすればそれは種々の使用価値からの抽象であるから「已に拡大された価値形態になつてくる」と理解されているのではなからうか、そうだとすると、このような宇野氏の理解は、さきの「一般的な使用価値となると理解出来ない」という反対論と同じ誤解にもとづくものであり、使用価値一般というが如き抽象化はありえず、この誤解に対しては「一般的な使用価値となると理解できない」という宇野氏の主張についてのべた見解がそのままあてはまることになる、として宇野氏の批判を終つてゐる。

ところで、宇野氏の主張を批判された以上のような久留間氏の所説に対しては次の疑問が残らざるをえない。すなわち、久留間氏の如くいわれるなら、リンネルは、 $20\text{フェルトのジャケット}$  という等式において、左辺の相対的価値形態に

置かれる以前から、つまり始めから価値物であり、上衣は逆に最初は価値物ではないのだが、 $ニクヤニニニ$ という方程式で右辺の等価形態に置かれることによって始めて価値物としての定在をうる、ということになってしまふのである。しかし、リンネルはいきなり自分を上衣に等置することによって価値形態をえているのではない、つまり、 $下ニニニニ$ という等式でリンネルは価値形態をえているのではなく、 $ニクヤニニニ$ という等式でリンネルは価値形態をえているのであるとしても、しかしリンネルが上衣を自分自身に等置することによって、すなわち久留間氏のいわれるように、 $ニクヤニニニ$ でまず上衣に価値物としての定在を与え、ついでリンネルの価値を上衣の使用価値で表現するのであろうか。私見によればそうではない。まず上衣は始めから商品であり、価値物である。そしてかかるものとして、 $ニクヤニニニ$ という等式では等価形態に置かれている。同様にリンネルも商品であり、価値物である。そしてかかるものとして、 $ニクヤニニニ$ という等式においては相対的価値形態に置かれている。もし上衣が、 $ニクヤニニニ$ という等式を経て始めて価値物となるなら、リンネルそのものはどうして始めから価値物なのであろうか。リンネルも、 $下ニニニニ$ という等式を経たのちに始めて価値物となるのでなければならぬ。しかるに、 $ニクヤニニニ$ という方程式は、それ自体なら  $下ニニニニ$  を意味しない。だから久留間氏のようにいわれるなら、リンネルも始めから価値物ではありえないことになる。久留間氏の見解では、リンネルは始めから価値物であり、上衣は  $ニクヤニニニ$  という等式をへて始めて価値物となる、とされている点が納得できないのである。マルクスも、さきの引用で「上衣が価値として、リンネルに等置されることによって……」（傍点―井上）とべているのである。このような久留間氏の所説は、したがってあやまりというほかはない。マルクスの方法は、資本制社会の商品を資本の性格を捨象してとりあげ、商品世界の平均見本としての一商品を、その商品の価値の質、

量、形態の順序で考察しているのであって、この商品の価値の形態を第一形態から第四形態へと追求することにより、貨幣の謎を説明しようとしているのである。だから、任意にとり出された  $c_1x_1 + c_2x_2 + \dots + c_nx_n$  という左辺と右辺の二つの商品は、いずれもそれぞれが価値物であり、商品であることはいうまでもない。

ではマルクスのいう「廻り道」はどのように理解すべきなのだろうか。さきのマルクスの叙述に即していえば、まず「上衣が価値物としてリンネルに等置される」ということは、上衣もリンネルも商品であり、使用価値と価値との統一物であるが、 $c_1x_1 + c_2x_2 + \dots + c_nx_n$  という等式においては、上衣は価値物としてのみリンネルに等置されている、ということである。そしてこのことは「機織との等置は、裁縫を事実上双方の労働における現実に同等なもの、人間労働というそれらに共通な性格に還元する」のである。すなわち、リンネルに含まれている労働がこの等式において始めて上衣の裁縫労働と同じものだと示している。もともと機織と裁縫という商品をつくる二重の性格をもつ労働が、この等式においては抽象的労働という共通の性格においてのみ意味をもつのである。そしてリンネルも上衣もそれが商品であり、使用価値と価値との統一物である以上、その商品をつくる労働も二重の性格をもっているのだが、それがこの等式においては、双方が価値物として等置されることにより、双方の具体的有用労働が抽象的人間の労働という共通性においてのみ意味をもち、かかる労働に還元されて示されているのである。だが以上のことはこの方程式においてのみリンネルが上衣を価値物とする、ということではない。上衣は始めから価値物Ⅱ商品なのである。リンネルも上衣も始めから商品であるということは、商品世界のなかからリンネルと上衣という二つの商品をとりあげ、方程式の左辺のリンネルの価値が上衣の自然形態をとおしてどのように表現されているかを問題にしている『資本論』の叙述の展開を考えれば、当然のことなのである。



### 三 宇野氏の久留間氏反批判

さて、さきの久留間氏の批判に対し、宇野氏は、久留間氏の批判はその論文が未完ではあるが、価値形態論に関する限りでは一応お答えしてよいのではないかと、として久留間氏への反対論を展開された。この反対論の基底には、序論においてもふれたように、氏のマルクス価値論への、さらにはマルクス経済学の方法への批判が横たわっているであり、これが伏線となって久留間氏の批判をしりぞけるのみでなく、却って久留間氏に認識不足があるのではないかと迫って来る。前にも述べたように、(一)価値形態Ⅰにおいて特定商品が等価形態に置かれるのは相対的価値形態にある商品の所有者の欲望による、という宇野氏の主張に対し、久留間氏は自己の論旨を、(1)等価形態に或る商品が置かれているのはなぜか、(2)等価形態に置かれている商品の使用価値が相対的価値形態に立つ商品の価値を表現しうるのはなぜか、の二点に分けてのべており、そして、この(1)については久留間氏も商品所有者の欲望の果す役割を自明のこととして十分に認めているが、(2)については商品所有者は何らの役割を果しえないのみならず、このような商品所有者をもちこむことのナンセンスなことを強調しているのである。しかるに宇野氏は(2)の点においても商品所有者の果す役割を無視しては理解できないとして、久留間氏への反批判を次のように行うのである。

すなわち、(2)の「等価形態に置かれている商品の使用価値が相対的価値形態に立つ商品の価値を表現しうるのはなぜか」について、久留間氏は氏のいわゆる価値形態論についての根本的な重要点「リンネルは先ず自分を上衣に等置しているのではなくて、上衣を自分に等置することによって上衣を価値物にしている」(前出)をもって解答とされるのであるが、宇野氏はこの久留間氏の主張を次のように批判される。マルクスがリンネルの価値の上衣による表現の

仕方を、久留間氏がいわれるように「上衣を価値として自らに等置する」というふうに説いているのは事実であるが、しかしこの表現の仕方が価値形態論の根本的な点であるとは考えられない。久留間氏は「リンネルが上衣を自らに等置すること」は宣言することになり、「リンネルがいきなり自分を上衣に等置すること」は「独りよがり」になるといわれるが、この場合久留間氏は、リンネルはその価値を使用価値なる上衣によって表現するにしても、リンネルは自ら上衣に対して交換を要求しえない地位にあり、上衣の所有者の出現によって、しかも彼の意志によって交換せられる以外に自らの価値を表現しえないということを指摘されるのではないかと考えられる。しかしそうだとすれば、「上衣は自分に等しいのだと宣言することによって上衣を価値物にする」(前出)場合の「宣言」もやはり「独りよがり」でないかどうかというのであろう。商品の価値表現は、むしろそういう「独りよがり」の「宣言」というところに特殊性があるのである。

このように宇野氏は、久留間氏が宇野氏の説を「独りよがり」とすることの意は、リンネルが「自ら上衣に対して交換を要求し得ない地位にあり、上衣の所有者の出現によって、しかも彼れの意思によって交換せられる以外に自らの価値を実現し得ない」(『価値論研究』一五六ページ)ことを指摘されていると考えるとして、今度は上衣の所有者の欲望までもち出してきたわけである。

ここでの「宣言」と「独りよがり」についていえば、宇野、久留間両氏に誤解があると思われる。宇野氏の指摘のように、「リンネルが上衣を自らに等置すること」と「リンネルが自分を上衣に等置すること」とは、一方では本質的に異なることであるが、他方では同一のことでもあるからである。なぜ異なるかという点、 $\text{L} \text{---} \text{M} \text{---} \text{L}$  ではなく  $\text{M} \text{---} \text{L} \text{---} \text{M}$  では、リンネルと上衣のそれぞれにとって価値表現上のもの意味がまったく異なることは自明である。

と同時に、この双方の等式がいずれも「宣言」とか「独りよがり」という点では同格だからである。ある意味では——というのは *コンシューマー* であるという等式は価値表現の問題であって、交換の問題ではないという意味では——、商品の価値表現は「独りよがり」の「宣言」であるという宇野氏の説が妥当でもある。その区別は、価値表現においてそれぞれの商品が右辺に置かれるか、左辺に置かれるかによって価値表現上の役割を異にすることとにすぎない。しかし宇野氏がこの価値表現の問題と混同し、この点に商品所有者の欲望をもちだすことは、この場合何の意味ももたないばかりか、久留間氏のいわれるように混乱の種をまくだけである。

商品所有者の欲望を重視する宇野氏は、さらに久留間氏の

「リンネルが上衣でその価値を表現する関係においては、上衣はもっぱらこの定在において機能するのであって、リンネルの所有者の欲望を満足させる物として——彼の身なりをととのえる有用物として——この役割を演じるのではない。上衣の使用価値は、リンネルの所有者にとつては、彼の所有する商品リンネルの価値の現象形態として——リンネルの等価物として——役立つのみでなく、従つてまた単に価値物としてのみ存在するわけではない。それは同時にまた、彼の欲望の対象として存在する。しかしリンネルにとつてはそうではない。リンネルは人間ではなく、従つてまた人間くさい欲望の持主ではないから、保温やおしゃれの手段としての上衣の自然形態は、リンネルにとつては何の係りもありえない。リンネルにとつては上衣の自然形態は、単にそれ自身の価値を映し出す鏡として役立つにすぎぬ」(『経済志林』十八巻一号二〇ページ)との所説に対して、

「こうしてみると、私が『資本論』の叙述で納得がゆかないように思った点が一層ハッキリとするように感じられる。リンネルは人間ではないから上衣の自然形態には何等の関心ももたないとすれば、そんなリンネルにまたどうし

てその価値を映し出す鏡などが必要なのであろう（商品の価値はみずから孤立的に表現しうるものではなく、必然的に他商品との交換関係において、マルクスの価値形態のⅠからⅣの形態においてのみ表現しうるものであり、価値物Ⅱ商品は、質、量、形態の統一としてのみ存在しうるものだから、この宇野氏のことばは暴言というほかはない——井上）。……そればかりではない。リンネルが『上衣は自分に等しいのだと宣言することによって上衣を価値物にすることはできる』『といつてもこの場合には単にリンネルにとってのみ通用することであって、爾余の商品に通用することではない』（一三一—一四ページ）ということにどうしてなるのであろう（価値形態Ⅰにあつてはリンネルの価値は上衣においてのみ表現されていることは自明であらう——井上）（『価値論の研究』一六七ページ）。だから簡単な価値形態で「上衣が有用物としてリンネル所有者の欲望の対象たること」なくして「そのままリンネルの価値を表現しうる」とでもいえるのであろうか、とされ、商品所有者の欲望にあくまでも重要な役割を与えている。

このように宇野氏が、価値形態論の本来的課題 20. *Formen des Wertes* におけるリンネルの価値が上衣の自然形態でもって外化表現されることを、いかに商品所有者の欲望をもちこむことにより独特に理解しているかは、宇野氏が久留間氏の次の論述を驚きをもってとりあげ、反論される場合、さらに鮮明になる。

「しかし教授（宇野）はどのようにして上衣が『リンネルと同じ質のもの』にされるかについては説明を与えられないで、その代りに『それは勿論リンネルを作る労働が、上衣を作る労働と等しいものとして……人間労働に還元されることによるのであるが、それは決して直ちに両者に共通な抽象的人間労働としてでなく、リンネルの織物労働を、具体的な上衣の裁縫労働と等しいものとするという、「廻り道」をして行われる抽象である、（傍点は久留間教授のもの）』といわれるのである」（同上二五九ページ）。

この批評を読み宇野氏は「全く驚かざるを得なかった」のであり、その理由は「私（宇野氏）の所謂廻り道が久留間氏の所謂『本当の廻り道』でないとしても、どうしてこれが『まるで「廻り道」をしない』ことになるのであるう」（同上二六〇ページ）ということからである。宇野氏は「久留間教授が傍点を附されなかった『それは決して直ちに両者に共通な抽象的人間労働としてではなく』の一句を抜かされない限り、『それはまるで「廻り道」をしないわけである』とはいえない筈だ、久留間氏が自分の廻り道を『本当の廻り道』としていることこそ本当の独りよがりではないだろうか」（同上）と反問している。

この反問は、まさに私がのべたように、久留間氏が氏の「廻り道」理解に固執されて、価値形態論では、上衣が始めから価値物商品である点を明確にしなかった結果である。それ故、宇野氏が「『それは決して直ちに両者に共通な抽象的人間労働としてではなく』の一句を抜かされない限り……」とのべている点は、久留間氏の価値形態論把握における誤謬をついたものといってよい。しかし宇野氏による久留間氏の誤謬の指摘は、正しい立場からのそれではなく、久留間氏よりもさらに独自のマルクス理解の立場からのそれであった。すなわち、宇野氏は、久留間氏が「真の廻り道」と「独りよがりの宣言」を区別していることの意味をまったく否定したのであるが、このような宇野氏の論旨は反転して、実に重要な次の発言、すなわち「廻り道」は実は「廻り切れない」ものであると宇野氏が考えていることを次のように告白される。

「実は『マルクスが「廻り道」といっている』ものがこの第一形態で廻り切ってしまうものであれば問題はなかったのである。私にはそれがどうも廻り切れないものとしか考えられなかったので、その点を問題としたのであった」（同上）。

ではなぜ廻り切れないのか、この点を宇野氏はさらに次のように続けられる。

「物の重さや、長さでもあれば、秤や物指をもってすればよいわけであるが、商品の価値は、貨幣で表現されたからといってもおはかられたとはいえない。実は秤にかけないで重さを表現するのに相当する。まして一商品の価値が他の一商品の使用価値で表現されたからといって、価値決定は決して『明確には出て来ない』のである。『第一の形態は、リンネルに含まれた労働を直接裁縫労働に対して等置するに過ぎない。』それだからこそ第二の形態への発展が必然的になるのである。第一形態で『廻り道』が廻り切れるのであれば、第二形態への発展は無用である。久留間教授は『上衣がリンネルの等価物としてリンネルの価値を表現する関係に』おける抽象的人間労働について、『この場合には、単にリンネルを作る労働と上衣を作る労働とに共通なものとしての抽象的人間労働にすぎない』(三〇ページ)と註釈してられるが、この二商品に共通な抽象的労働といっても、それは『具体的な上衣の裁縫労働』としてしかあらわれないであろうか。しかもそれは一方的にリンネル所有者の側にとってのみそうであるに過ぎない。上衣の所有者にとってはまだ関係のないことである」(同上二六二―三ページ)。

「簡單なる価値形態から拡大されたる価値形態、一般的価値形態へと展開されるにしたがって、商品の価値の表現も益々明確に、したがってまた等価物の地位も漸次に貨幣形態に、尤もその間に飛躍的な逆転を経るが、近づいて来るものと理解している。『廻り道』自身が個別的なものから一般的な社会的なものに発展して来る。等価物に対する相対的価値形態にある商品所有者の関係もまた変化せざるを得ない。個別的な、簡單な価値形態では直接的に相手の商品に対する欲望が重要な地位を占めるが、貨幣形態は勿論のこと、一般的価値形態でも已にそうはいえないものになる」(同上二七一ページ)。

このように宇野氏は簡単な価値形態から貨幣形態への発展の必然性があるのは廻り切れないからであるとされる。ここで宇野氏がのべていることは、価値形態Ⅰでは左辺の商品の価値は右辺の特定商品においてのみ表現されているにすぎないので不十分だ、ということにすぎない。このことと廻り切れるか否かという問題は同じ問題ではないのであって、ここにも宇野氏のひとりよがりがある。ところが久留間氏にとっては、あくまでも商品の価値方程式は「所与の事実として前提」され、価値の表現形態の発展の問題とされている。このことは先にもふれたように、久留間氏の力説しているところであり、この久留間氏の見地にたいし、宇野氏は、

「尤も教授（久留間）にとつては、価値形態論ではリンネル二〇エルレが上衣一枚に価するということが、已に『所与の事実として前提』された上で『独自の問題』を、いい換えれば如何にしてかかる表現が可能かということが採り上げられるに過ぎないものである。マルクスにあつては商品の価値の実体が已に規定された後に価値形態が説かれていたので、価値形態論にそういう面が可なり重要な地位を占めていることは私も認めるのであるが、しかし私は『価値論』で殆どその全巻を通して論じたように、最初に価値の実体を規定することは論証の方法として、疑問があると考えたのであって、実は、その点に関する私の誤りを明らかにして貰わなければ、いきなりこういわれても少しも問題は片付かない」（同上五六一七ページ）とされているのである。ここに氏のマルクスによる価値の実体規定の論証方法に対する——それ故『資本論』の叙述そのものに対する——根本的疑問が表明されており、この点についての疑問を氏は『資本論』研究座談会（『評論』昭和二年三、四月号八九一—〇五ページ）で提起し、その後の『価値論』のほとんど全巻を通じてこの問題を論じている。

以上久留間氏に対する宇野氏の反論を簡単に要約すると、それは久留間氏が「上衣が等価形態に置かれること」と

「等価形態に置かれた上衣がリンネルの価値を表現しうることを分離し、価値形態論固有の課題——ある一定の価値方程式を所与のものと仮定して、そのうちに含まれている価値表現の関係、すなわち左辺の商品の価値が右辺の商品の使用価値で表示され、かくして左辺の商品がそれ自身の商品の使用価値の形態から区別された価値の形態を得る——においては、前者の問題は何ら本質的な関係を有せず、後者こそ価値形態論の本質的課題であり、この課題を解く鍵は「リンネルは先ず自分を上衣に等置しているのではなく、上衣を自分に等置することによって、上衣を価値物にしている」の一句にあり、前者においてはともかく、後者のこの一句の理解には何ら商品所有者をもちだす必要はないのみならず、固有の問題を純粹に考察する妨げになる、というのに反し、宇野氏はこの点は何ら根本的であると考えられないのみならず、この場合にも商品所有者を出現させなければ理解できないとし、逆に「廻り道」は実は廻り切れないのだ、とマルクスへの根本的な疑問を提出している、ということにある。そして宇野氏がこのように論旨を展開させた一つの遠因としては、久留間氏の「廻り道」解釈にさきのような誤まりがあったためであるといえよう。がそれにしても、宇野氏の疑問は実はマルクスが『資本論』で採用している叙述の方法、したがって経済学の上向法に対する根本的否定のうえにのみ成り立つ疑問であることは明らかであろう。

#### 四 久留間氏の宇野氏批判(一)

以上のような宇野氏の主張に対する久留間氏の反批判は論文(二)の後半においてなされているが、しかし久留間氏はその前に宇野氏の反批判には関係することなく、宇野氏批判を論文(二)および(三)の前半において続行している。

久留間氏はまず「価値形態論と交換過程論(一)」において評論した点、すなわちリンネルの価値がたまたま上衣で表



現されることになったのは、リンネル所有者の欲望の対象だからに違いないが、そのようなことは価値形態論で考察すべき固有の問題に属しないことを繰返し、さらに価値形態論の目的は「商品の価格、すなわち貨幣形態の謎を解くことによって貨幣の秘密を解くことであるが、この貨幣形態の謎は、つきつめて考えてみると、結局、商品の価値が他商品の使用価値で——すなわち価値とは正反對のもので——表示されるといふ異様な事実に根ざしているということ」(『経済志林』十八卷三号四ページ)であり、簡単な価値形態において始めて商品の価値はそれに等置される他商品の使用価値で表示されるが故に、一商品の価値が他商品の使用価値で表示されるのはいかにして可能かという基本の問題が純粹な形で提起されるのである、と指摘される。そして、このような基本問題の解決においては商品所有者の欲望は捨象されねばならず、かの価値表現の「廻り道」の発見こそが価値形態の秘密を解く鍵であることを重ねて強調し、宇野氏にあってはこの点が十分に理解されていないがために、「リンネルの所有者が上衣を欲しいということがなければ、上衣の使用価値という形で表わすことができない」と考えることになるのであって、これはまったく的はずれの顧慮である、と断ずる。

次に「その欲望をも抽象してしようと、上衣自身もその価値をリンネルで表わされて、相対的という形が相互的になる」という宇野氏の発言をとりあげ、これまたまったく無用の心配である、けだし、20マルクのウルクネン＝1枚のFが所与のものとして受けとられている限り、リンネル所有者の欲望を考えるまでもなく、価値を表現する立場に、すなわち相対的価値形態にあるのはリンネルであって上衣でないことは明らかであり、上衣自身もその価値をリンネルで表わされることには決してならない、と説明し、もちろん、20マルクのウルクネン＝1枚の上衣はそれとは逆な1枚の上衣＝20マルクのウルクネンとどう関係をも含んでいることをマルクスも指摘しているが、これは20マルクの

「 $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$ 」の「 $\frac{1}{4}$ 」と、いう交換比率がリンネル所有者の単なる欲望を表わすものではなく、正常的な交換比率として客観的に確立されているからである、しかしこのことは所与の価値方程式である  $20 \text{Hマニツ} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$  の「 $\frac{1}{4}$ 」において、「上衣自身もその価値をリンネルで表わされる」などということの意味するものでは絶対でない、と注意し、価値方程式をあくまでも所与のものとして受けとるべきだ、と説得されるのである。

そしてさらに久留間氏は、しかしこういうことを説明しても宇野氏の納得は得られないのではないかと、として、宇野氏の「例えばリンネルの所有者がないとすると、等価値態にある商品の使用価値、上衣に対する欲望もないことになる。リンネルと上衣とが互に価値を表現することになる。所有者があつて始めてリンネルは相対的価値形態にあつて、リンネル所有者としてはその価値を能動的に表現する要求を持つて来るわけだ」なる所説を検討される。この宇野氏の主張の後半は、価値表現の場合にあつても主体は人間であつて商品ではない、という考え方であつて、これが所有者を考えないと価値表現の主体が分らなくなる、という宇野氏の考え方の真の基礎をなしていることを明らかにしたのち、久留間氏はこの場合をもそも  $20 \text{Hマニツ} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$  の「 $\frac{1}{4}$ 」という式は、リンネルの価値の表現であつて、リンネル所有者の価値の表現ではない、すなわちリンネルの価値表現は商品としてのリンネルの本性から来ているのである、商品の所有者は商品の本性を自己の本能として感じ、それに基づいて行為しているにすぎない、したがつて商品がこの方程式の主体であり、商品所有者はいわばロボットにすぎない、「人格の物化及び物の人格化」といわれるゆえんはここにある、と指摘される。

ところで、以上の点はすべてマルクスが詳しく説明しているところであるのに、なぜ宇野氏は所有者を抜きにしては価値表現の主体がわからなくなるなどといわれるのか、それには宇野氏をそう思わしめる特殊な事情があるものと

考えなければならない、として、さらに久留間氏は次のように簡単な価値形態における等価形態の二つの役割を明確化する。すなわち、簡単な価値形態においてはじめて「商品の価値はそれに等置される他商品の使用価値で表示される」という事実が如実に表われ、従って如何にしてそういうことが可能になるかという基本的問題が純粹な形で提起されうることになる」(『経済志林』十八卷三号五ページ)のであるが、他面まさにこのことのために、これを純粹に価値の形態として考察することに別個の困難が付加わって来る。この困難はどこから生じるかというに、簡単な価値形態では商品の価値はまだその所有者の欲望から独立化した形態をとっていないという事情からである。たとえば 20 $\frac{1}{2}$  マンツの「ワタのシャツ」において、一枚の上衣は二〇エルのリンネルの価値の形態であると同時にリンネル所有者の個人的特殊的欲望の対象でもある。かくして上衣はここでは全然別個な二つの役割、全然別個な二つの規定性を有している。この本質的に異なる二つのものを区別するためには、「抽象力を集中的に緊張」させねばならない。簡単な価値形態において一見区別しがたく結びついている二つのもの、すなわち④リンネルの価値の形態であるという上衣の役割と、⑤リンネル所有者の欲望の対象であるという上衣の役割は明確に区別せねばならず、商品の価値の形態が商品所有者の個人的欲望によって制約されるということは、価値そのものの本性にもとることであり、価値の形態としての致命的欠陥を意味する。だからこそ簡単な価値形態は貨幣形態にまで発展せざるをえないのである。ところで貨幣形態においては、簡単な価値形態において一見区別しがたく結びついているこの二つのものがどのようになるかを考察してみると、 $W_1 - W_2$  は  $W_1 - G$  (販売) および  $G - W_2$  (購買) の二つの過程に分化し独立する。 $W_1$  の方は  $W_1$  の価値形態の実現の過程であるが、 $G - W_2$  の方はまったくその意味が異なる。というのは、貨幣は、それ自身すでに一般的等価物としての形態規定にある商品であり、したがってその自然形態がそのまま価値の主体と

して一般的に妥当しうるのであるから、今さら他商品の使用価値を価値の主体として、それによってみずからの価値性質を表わす必要はない。したがって貨幣は本来の意味における相対的価値形態とは異なるのであって、マルクスはこれを「貨幣商品の独自の・相対的価値形態」(Speziell relative Wertform des Geldware)と呼んでいる。それ故商品所有者はここにおいて始めてその役割を演ずる。すなわち貨幣は一般的な直接的な交換可能性の中にあることを意味するにすぎないのであって、この可能性がいかなる商品との交換によって実現されるかは商品の関知するところではないからである。 $W_1 \parallel W_2$  (したがってまたその表現として  $G \parallel W_1 - W_2$ ) においては前述の二つのものが未分離のうちにある。すなわち  $W_2$  が  $W_1$  の価値表現の材料であるという役割はのちに発展して  $W_1 \parallel G$  に独立化し、 $W_2$  が  $W_1$  所有者の欲望の対象であるということが  $G \parallel W_2$  において独立化する。だから  $W_1 \parallel W_2$  においてこの両者が未分離であるということは、この両者が無区別だということではありえない。このことは価値形態自身が発展して貨幣形態に至るといふ事実そのものが証明していることなのである。以上のようにのべた久留間氏は、このような点こそが宇野氏をして所有者を抜きにしては価値表現の主体がわからなくなるといわしめる特殊の事情ではなからうか、と推測される。

なお以上の上衣の二つの役割の混同に関連する宇野氏の「等価形態にある上衣はまだ現物として表わされていないのだから能動的になることはない」とか、「等価形態にある商品は観念的にあるので現実には所有者と対立していない」とか、「等価形態にある商品はまだ現実には交換に提供せられていないのです」などの説を、久留間氏は、上衣が商品として実在せねばそもそも交換は永久に成立しえないとし、宇野氏は等価形態にある商品はそれが等価形態に置かれていて価値関係の内部においては、単に表象されたものとしてあるにすぎないということから前記のような発言を

したのであろう、として、宇野氏の思いちがいをしりぞけられる。

以上の総括として久留間氏は、「これを要するに、価値表現の主客の別が確認されないのは、商品所有者の慾望を考慮に入れないからでもなければ、商品が実在するか否かを勘考しないからでもない。それはもつぱら、価値方程式を所与のものとして受けとらないからであり、あるいはまた、たとい所与のものとして受けとつても、その内容に眼をうばわれて、(あるいは実体論的な見地にとどまらぬ)、これを形態の面から——価値表現の形態として——観察しないからである」(『經濟志林』十八卷三号二二ページ)とのべ、もし宇野氏が懸念されるような主客混同の通弊があるものとすれば、すべからず科学的分析者の立場に立つこと、一定の方程式を所与のものとして受けとること、価値形態の究明に従事する場合には、これを価値表現の形態として観察し、そこに価値表現の關係を探究し析出することに努むべきであること、を主張して「価値形態論と交換過程論」を終えている。

以上の久留間氏の論文(㉒)における所説を要約すれば次のようにいうことができよう。

(1) マルクスが「簡単な価値形態」で論じている中心的な問題は、商品の価値が他商品の使用価値で表示されるといふことは一体どのようにして可能なのか、という点にある。したがってマルクスはリンネルの等価形態になぜ上衣が置かれたかは問題にしていけないのである。また仮りに問題にしてみたところで右の根本問題の解明には何の役にも立たない。両者は別の問題である。故に価値形態の秘密の核心をなす右の根本問題を考察する場合には商品所有者は捨象されねばならない。

(2) 一定の価値方程式を所与のものとして受けとる場合、価値表現の主体は価値表現の式とともに与えられている。したがって商品所有者の「慾望をも抽象してしまふと上衣自身もその価値をリンネルで表現されて、相対的という形

が相互的ということになる」ということはできない。

(3) 価値表現の場合、主体は商品であつて人間（商品所有者）ではない。人間は商品の本性によって行動するロボットであるにすぎない。

(4) 簡単な価値形態  $W_1$ 、 $W_2$  において、等価形態にある  $W_2$  は二つの役割、すなわち  $W_2$  は  $W_1$  の価値の形態であると同時に、 $W_1$  所有者の欲望の対象であるという二重の規定性を有するが、この二つは全然別個の事柄である故この二つを峻別すること。

(5) 要するに、商品所有者の欲望とか、等価形態にある商品の實在、不實在などを問題にすることなく、価値形態論の中心的問題の究明に従事することが肝要である。

## 五 久留間氏の宇野氏批判(三)

久留間氏は「価値形態論と交換過程論」(一)、(二)に引きつづき(三)を発表して宇野説批判を続行し、さきの宇野氏の久留間氏への反批判の検討をこの論文の後半において展開されている。

まず宇野氏の主張の(三)一般的価値形態と貨幣形態との差は商品所有者の欲望を考慮に入れることによって始めて明確となる、という見解に対して、久留間氏は次のように批判される。すなわち、マルクスは価値形態の發展上の段階として形態Ⅲから形態Ⅳの間に本質的な差異はないもののように説いている。したがって宇野氏の形態Ⅲと形態Ⅳの本質的な差異は商品所有者の欲望を考慮に入れることによって始めて明瞭になる、という説は、マルクスの欠陥を補う素晴らしい思いつきのように思われたいではない。また宇野氏のいわれるように、価値形態の發展の過程が同時に商

品所有者の個人的欲望から独立した価値形態の形成の過程であるということは、マルクスも指摘していたことであつて、もちろん疑いのない事実である。ただ注意すべきことは、宇野氏がこれらのことを「価値形態論」上の問題であるとし、これに着目しない限り価値形態の發展がわからなくなると考えるのに反し、マルクスは「価値形態論」では一言もこれにふれないで交換過程論で始めてこれを問題にしているという一事である。マルクスのこのような叙述の仕方はずいぶんであるかというに、言うまでもなくマルクスが「価値形態論」で設定している問題にとつて商品所有者の欲望を導入することが何の役にも立たないからである（マルクスが「価値形態論」において商品所有者の欲望を捨象しているのはまさにこの故にほかならないのである）。

このように宇野氏を批判された久留間氏はさらに、このことは私は最初の論文で明らかにしたのであるが、これに對し宇野氏は早速反批判「価値形態論の課題——久留間教授の批評に答う」（『經濟評論』昭和二年七月号）を發表して答へられたのであるが、そこに見出される主要な論拠の一つは、商品所有者の欲望を抜きにすると簡単な価値形態が価値形態論の發展過程上にある地位が理解できなくなるといふことである、として、宇野氏の所論を引用しつつ直ちに久留間氏自身の反對論をのべられた。そのなかでとくに新しい論点を紹介すれば次の点である。

すなわち、一般的価値形態から貨幣形態への移行の場合であるが、マルクスは「第一の形態から第二の形態への、第二の形態から第三の形態への、移行に際しては、本質的な諸変化が生じる。これに反して第四の形態は、いまやリンネルの代りに金が一般的な等価形態をとること以外には、第三の形態と何ら相異はない。金は第四の形態においては、依然としてリンネルが第三の形態においてそれであつたもの——一般的な等価物である」（『資本論』第一卷、インスٹیテュート版七五ページ、訳は久留間氏）とのべている。だがそうだとすれば、いったい何のためにマルクスはなぜ

わざわざ形態Ⅲから區別して形態Ⅳを認めたのか。この点こそ宇野氏が商品所有者の欲望をもちだし、新説を提唱するところなのである。宇野氏の見解は、一般的等価物が貨幣商品になると、「最早や……その商品としての使用価値がそのまま欲望の対象となるのではなく、『一般的交換手段』として役立つという『総ての人に対する使用価値——一般的使用価値』として他の商品に對置せられる」という点に貨幣形態の特徴を見出すことにある。これに對して久留間氏は次の点においてこれに答える。すなわち、第一に宇野氏の考え方は「結局は一般的交換手段として役立つ」ということを価値形態論上の概念規定の根拠にし、前提にしていることであつて、誤謬である。「一般的交換手段」は価値形態の貨幣形態への發展に伴つて貨幣商品が必然的に獲得する機能であるが、それは決して価値表現上の機能ではなくて交換過程上の機能であり、したがつて「一般的交換手段」を前提として価値形態論を展開することは、流通手段としての機能を前提として価値尺度論を展開するのと同様に方法的に誤謬である。次に「一般的交換手段」になるということをのぞいては形態Ⅲと形態Ⅳとの區別にはいかなる意味があるのか。価値形態論の究極の目的である燦爛たる貨幣形態の謎を解くためには、一般的等価形態が特殊の商品種類の自然形態と終局的に癒着することとおよびかくして等価形態の物神性の飛躍的發展がもたらされるものであるということを理解することは非常に大切なことであり、したがつてこの点にこそ形態Ⅲと形態Ⅳを區別するところの重要な意義が存するのである。だから問題は一般的価値形態から独立した貨幣形態を認めたのは何のためかと問うのではなく、貨幣形態の前段階として一般的価値形態を認めたのは何のためかと問うことによつて、いさう容易に理解しうることになる。われわれの前に現実に与えられているのは貨幣形態であるから、これを最後の形態とするのは当然のことである。貨幣形態の謎を解くにあたり、それを一般的価値形態に還元しえたということによつて、さらにこれから拡大された価値形態へ、さらに簡



単な価値形態へと遡及することができ、かくして貨幣形態の謎は消滅するのである。この点に形態Ⅳから形態Ⅲが獨立して存在することの意味があるのである。したがってこの両者の区別を理解するために商品所有者の欲望を考慮することは、価値形態論の本来の課題の解決には無用のみならず有害なのである。

以上のように久留間氏はその所論を結んでいる。ここでも明らかな如く、久留間氏が価値形態の分析そのものによって形態Ⅰから形態Ⅳへの発展を説明できるとしているのに反し、宇野氏は商品所有者の欲望を導入してこれを説明しなければ理解しがたいとしているのであり、かくして両者の対立は最後までなんらの一致点をも見出さなかったのである。

さて、以上の論争における両氏の立場の相違は明瞭である。すなわち、久留間氏がマルクスの方法に即して問題を展開している——とはいえそこにはさきにみたような誤解も含まれていたのであるが——のに対し、宇野氏はマルクスの方法に根本的な疑問をもちながら独自の見解をなし、独自の方法によって問題を展開していたことである。宇野氏の主張を一貫しているものは、商品所有者の欲望を抜きにしては価値形態論を理解できないということであり、久留間氏の主張を一貫しているものは、商品所有者の欲望を捨象して理解できるし、またそうしなければ価値形態論の課題を純粹に理解する妨げとなるということである。このように久留間氏はマルクスの方法に即して問題を展開しているのに対し、一方の宇野氏はマルクスの方法に根本的な疑問をもちながら独自の方法によって問題を解決しようとしているのだから、ただ宇野氏がマルクスに即していないからといって宇野氏を批判しても、宇野氏が納得しえないのは当然のことであろう。<sup>3)</sup>

(3) 「資本論ではこう叙述されていることを以て、私の疑問に答えられたのでは、答にならない。一体われわれ自身はどう考えるか、どういう風に論証して行ったらよいか、その点で私の論証に誤りがあるか否かを正して貰いたいのである」(『資本論の研究』一四九ページ)。

そこで次にマルクスと異なった解釈をされる宇野氏の見解そのものが果して正しいか否かが検討されねばならない。そしてこの点の検討こそ両氏の論争を終局的に解決するところの残された課題である。このため宇野氏による価値の実体把握の方法がいかなるものであるかを次にみなければならぬ。

## 六 宇野氏による価値の実体把握

宇野氏の久留間氏に反対される立場は、マルクスによる商品の価値の実体規定の論証方法(『資本論』第一巻第一章第一節)、すなわち「*クォーターの労働時間*」なる方程式における共通なものは何か、において、まず使用価値を捨象し、ついで使用価値を形成する労働の具体的な諸形態を捨象して、幻のようなその支出の形式には頓着のない「抽象的人間的労働」を抽象するマルクスの方法に対する宇野氏の根本的疑問から実は発している。そこでこれまでの両氏の論争を最終的に整理するためには、次にこの宇野氏の根本的立場そのものがいかなるものであるかを検討しなければならぬ。

宇野氏は『価値を形成する実体』としての労働は有らゆる形態を捨象したいわば消極的なものにすぎなかった。吾々はこれをそのまま価値形態の根拠とすることは出来ない(『価値論』二四八ページ)とし、逆に「かくの如き形態規定の発展を媒介にして、『価値の実体』を『価値の本質』に於いて把握しようと試みる」(同上二五〇ページ)のであ

る。宇野氏がここで価値の形態というのは、単に第一章第三節の価値形態をさすのみならず、価値の貨幣形態から資本形態への発展をも含んでいる。すなわち、宇野氏は『資本論』冒頭の第一節において、抽象的に、あるいは消極的に明らかにされた価値の実体としての労働は、資本の生産過程において始めて明確に確立されるのであるから、マルクスの叙述のように、一商品の価値がどのようにに他商品の使用価値を通じて現象するかという問題はそれほど意義をもたないばかりでなく、価値形態論が商品所有者の欲望という契機を挿入されずしてマルクスによって展開されていることがまったく不可解でならなかったのである。

## 七 結 論

マルクスの分析は資本制社会の生産関係のもつとも下向しきった到達点「商品」から始められている。「商品」をさらに下向すれば「単なる生産物」に到達するが、この場合には社会的分業と私的所有を基本とする商品生産社会をはみ出てしまう。だから「商品」こそ上向への出発点、端初である。ところで、この「商品」から出発せねばならない点については、宇野氏は何ら反対されてはいない。しかし、なぜ「商品」から始めなければならないかについての宇野氏の理解の仕方はマルクスのそれとは異なっている。というよりは、マルクスとは異なった理解を示すことが通説とは異なった深いマルクス理解であると宇野氏は考えておられるようである。このことは氏の『経済原論』の構成に示されている。すなわち、「宇野弘蔵氏が、その著『経済原論』(上巻)において、『われわれはまず第一に商品、貨幣、資本の流通形態を明らかにしなければならぬ』(二〇ページ)としてその第一章『商品』および第二章『貨幣』をば第一篇『流通論』の中に含ませ、商品形態をたんに流通形態としてのみとらえようとされているのは、それが資

本制生産のもつとも簡単な生産関係をあらわすものにほかならないこと、および商品の分析はまさにこの生産関係の解明にほかならないことを無視しているという意味で誤まりといわなければならぬ」(山本二三丸「商品」『資本論の解明』理論社、第一分冊五九ページ)と批判されたように、「商品≡価値物」を根底から理解するため、価値とは何か、(価値の質の規定)、その大きさはどのようにしてはかられるか(価値の量の設定)、価値はどのような目に見える状態をとるか(価値の形態の規定)という価値の質、量、形態の規定がなされているマルクスの商品論を宇野氏は流通論のなかでとりあげているのである。そして宇野氏が商品論を単なる流通論として把握されるのは、いうまでもなく、氏が『資本論』の冒頭で「最初に価値の実体を規定することは論証方法として疑問がある」とされており、価値の実体はそこでは十分に把握されえない、とされているからである。

宇野氏は『資本論』全巻の出発点が「商品」であることは否定されない。ただ宇野氏にあっては、この冒頭の「商品」たるや価値の本質として把握されていないところの、価値の実体の確立していない商品なのである。だが価値の実体の確立していない商品などという理解が許されるであろうか。「単なる生産物」に商品形態を与える必然性は特定の生産関係なのであり、この生産関係こそは労働に二重性を付与し、単なる生産物を使用価値と価値との対立物の統一たる「商品」たらしめる根拠であり、そしてまた生産物に商品形態を付与することが、同時にとりも直さず価値形態の成立を意味するものなのである。商品があつて価値の実体が確立していないとか、価値の実体があつて価値の形態がないとか、逆に価値の形態があつて価値の実体がないなどということは、まったくナンセンスな議論である。つまり、質、量、形態の統一としてのみ事実は存在しているのである。したがって、宇野氏が冒頭の「商品」がまだ価値の実体を確立していない消極的なものであるとするのは、ただ単にマルクスの方法に即して『資本論』の

冒頭で価値の実体を把握する方法は正しくないという宇野氏自身の告白にほかならない。すなわち氏は、「商品の価値」は、個々の商品をとって見たのでは、その実体を把握することができない。吾々が第一篇の流通論で商品を取扱ったばあいには、その形態を明かにするのに終始したのもそのためである。そして第二篇生産論においてあらゆる生産物が資本によって生産せられる資本の生産過程を明かにするにいたってはじめて、その実体を労働に求めることができたのである。いまや生産論を終るにあたって、あらゆる生産物が商品として生産される資本家的再生産過程を統括的に展開するとき、価値法則は、「否定しえない絶対的基礎をあたえられる」(『経済原論』二六八―九ページ)とのべられ、マルクスのように最初に「商品」をとりあげて、頭脳の抽象力により価値の実体を把握することはできない、とされているのである。だから、ここでの宇野氏の疑問は、抽象から具体へ、単純から複雑へと上向するマルクスの叙述の方法、その叙述とともに発展する認識の問題に関するものであり、『資本論』冒頭で価値実体を把握するいわゆる「蒸溜法」などとも呼ばれているマルクスの方法が、宇野氏にあつては非科学的方法とみられているのである。この点はマルクスを学ばんとする者にとってまず第一に問題となるところであり、「マルクス反対論の最も有力な地盤がこの誤解の中にある」(相原茂氏)とされているところである。実際マルクスの方法は、当初はあたかも先験的構成に耽るまったく観念的な頭の中のでっちあげであるかの如く思われる。だが実は、使用価値を捨象し、さらに労働の具体的な形態を捨象することによって、価値の実体を把握するマルクスの方法は、顕微鏡も試薬も使用することのない社会科学における正しい思惟方法なのであつて、たとえそれが「抽象」的ではあつても何ら観念的産物ではなく、現実社会における無数の幾億回となく繰返される社会的客観的行為より生ずる社会的実体の認識にほかならない。マルクス自身、一八五八年四月二日付エンゲルス宛の手紙で、「抽象といつても、社会の一定の経済的發展の基礎

の上で初めて行われた歴史的抽象」(『資本論』に関する手紙、岡崎次郎訳、上巻八六ページ)であることを指摘している。

またマルクスが叙述の出発点において価値の実体を規定した場合、それは単なる出発点ではなく、終末を含む出発点であり、マルクスの頭脳の中には価値形態の発展から資本の生産過程および剰余価値の具体的な現象形態がほぼその細目に至るまで把握されていたのである。ただ叙述の出発点においては、これを抽象的なものから始める以外に異なる方法もありえなかつたのである。だから、マルクスが価値の実体の論証を抽象的に行つたとしても、その抽象たるや客観的事実の老大な研究の成果としてなされてるのであつて、『資本論』全巻がその証明である。マルクスにあつては、周知のように具体的な現象形態の下向の結果として始めて上向の出発点としての端初が確定されているのである。レーニン「思维は具体的なものから抽象的なものへと登つてゆくが、思维が正しければ(注意)(カントはすべての哲学者と同じく、正しい思维のことを言っている)——真理から離れず、真理へと近づいてゆく。物質という抽象、自然の法則という抽象、価値という抽象等々、一言で言えば、すべて科学的な(正しい、真面目な、不条理でない)抽象は、自然をより深遠に、より正確に、より完全に反映する」(『哲学ノート』、広島定吉訳、理論社、七四ページ)とのべているが、マルクスの価値の実体としての「抽象的人間的労働」なる範疇もまたそうである。しかし、すべての正しい抽象はそれが客観的事実の本質的把握であるとはいへ、これらはわれわれの感性によって直ちに知覚できるものではなく、逆に感性にとつては理解しがたいものとして存在する。レーニンはこの点について次のようにのべている。「価値とは感性的素材のない範疇であるが、需要供給の法則よりも真なるものである」(同上八七ページ)。したがつて感性的素材にとほしいが故にある範疇が正しくないなどとは到底いいえない。マルクスの「蒸溜法」は単に『資本論』の冒頭において観念的になされているのではなく、マルクス以前の経済学研究上のいっさ

いの成果をふまえたうえで、すなわち下向法の帰結として、商品価値の分析がなされていたのである。

したがって、『資本論』冒頭で価値の実体を規定するマルクスの論証方法は、具体的なものを精神的に再生産するための、思惟にとつての必然の様式であり、もっとも正しい認識方法であつた。「抽象的人間的労働の把握は価値形態の発展のうちに確立せられる」とか、「価値の内容規定は資本の生産過程において始めて十分に理解し得る」とかの宇野氏の言葉は、確かにそれ自体の一面的な正しさを認めることができなくはない。すなわち研究はあらゆる角度からなされねばならないからである。しかし、だからといって、弁証法的発展の道筋を展開するマルクスの叙述方法、抽象より具体へ、単純より複雑への上向法があやまりであるとはいえない。研究材料の素材に引きずり廻されたり、または歴史的展開を試みて、弁証法的に叙述されなかつたなら、マルクス自身が悩んだように、『資本論』は今の何十倍かの老大なものとなつたであらう。

商品所有者の欲望という契機を加えて考えなければ、価値形態論は理解できないとか、「廻り道」を通してのみ一商品は価値物たりうるとか、マルクスの叙述方法の必然からして、最初に抽象的にのべられたところが、その後より具体的に展開されたからといって、最初の抽象的段階で価値の実体が把握されるとするのは間違いで、その後の具体的展開によつてのみ把握されるものである、などという見解は、基本的には、あらためて指摘するまでもないはずのマルクスの『資本論』のもつ叙述上の特質、『資本論』における認識論の正当な理解から離れることによつてのみ発生しえた疑問であるといつても、決していいすぎではないであらう。

最後に、マルクスはなぜ「価値形態論」と「交換過程論」の二個所で二重に、貨幣の必然性を論証したかという点に簡単にふれておこう。この点もまた『資本論』の叙述の方法によるのである。すなわち、マルクスは第一章「商

品」で、客観的には使用価値と価値の不可分の統一物である商品を、その使用価値、価値という順序で考察し、ついで価値商品についても、同じく客観的には不可分の実在である商品価値の質、量、形態を、思惟の抽象力でそれぞれ考察した。価値形態の論理的発展をたどることにより、商品から貨幣がいかにして発生するかを明らかにし、そして第二章の「交換過程論」では、第一章で、使用価値、価値、価値の質、価値の量、価値の形態という順序で明らかにした商品の理解を前提とし、使用価値と価値という対立物の統一としての商品が互に交換される過程、——現実の交換過程では商品交換は商品所有者によってのみ行なわれる——を研究し、この交換過程のなかで商品の使用価値と価値との矛盾が、どのようにその解決としての貨幣を必然的に生み出すか、を明らかにしたのである。こうして貨幣の必然性は二個所で、二重に論じられ、ブルジョア経済学では説明することのできなかつた貨幣の謎が、マルクスによって始めて解決されたのである。